

# 書肆えん通信

No. 2

2016・07・23  
書肆えん  
秋田市新屋松美町  
5-6

振り返れば……………寺田和子 1

振り返れば——詩と花と絵本と

寺田 和子

## I 詩と出会つまで

### 一 誕生から小学校入学・転校まで

昭和十九年十二月七日、土崎の伯母の家で生まれた私は、生後百日で角館に引越し、小学校一年の夏再び土崎に引越してくるまでそこで育ちました。当然言葉は仙北弁です。土崎での第一日に、大家さんの息子二人に仙北弁を笑われ、早速ケンカしてしまいました。これが自分の話す言葉とは異なる言葉との出会いでした。

### 二 中学校で——詩との出会い——

中学に入学して間もなくホームルームで自己紹介をすることにになりました。その前に既に土崎弁をからかわれていた私は、次々と滑らかに自己紹介をするクラスメートに圧倒されていました。それまで使ったことのない「わたし」という言葉を使わずにどうにか自己紹介を終えたものの、周りの人とうまく話せない私にはなかなか友達ができません。心身共に他の人たちより幼かったのでしょうか。自分の殻の中で悶々とするばかりでした。

楽しみは部活動の卓球と電車通学、それから昇降口の黒板にチョークで書かれている詩を読むことでした。一年の秋に国語の授業の課題で「詩」を書くことになりました。校地内ならどこに行ってもいいというので、ひとりグラウンドに出ました。学校の周りには稲刈

りの終わった田んぼが広がり、グラウンドの周囲の背の高いポプラの木々が風に揺れていました。

とんぼ

稲刈りが終わった田んぼで

赤とんぼが遊んでいる

二匹つながって……

親子かしら 兄弟かしら

赤とんぼが枯れた稲のかぶにとまった

大きな目玉を

ぐりぐりさせて……

この授業をきっかけに私はノートに詩らしきものを書いては先生の所に持っていくようになりました。先生はいつもそのノートに感想や色々な詩人の作品を書いてくださいました。ノートは中学卒業までに五冊ほどになっていました。

これが詩と私の出会いです。この出会いがなかったら今の私はなかったといえるほど、私の人生にとって大きな出会いでした。この出会いに導いてくださった山岡雄平先生には心から感謝しております。

### 三 高校・大学の頃——短歌と詩と——

高校・大学と文芸活動は続きます。短歌と詩と両方も捨てがたかったというところでしょうか。

高校を卒業する少し前から「さきがけ詩壇」に時々投稿するようになりました。そして、昭和三十九年（七〇九月）沢木隆子先生が選者でいらしたとき、思いがけず推薦作家の報を受けました。わずか一編しか投稿しなかったのに、と本当に驚きました。その時は大先輩の牧野孝子さんがご一緒でした。

#### 真夏の映像

道いっばいに脹れあがる陽光の中を

地下足袋の老婆がリヤカーを引いて行く

朝のささやかな収穫を現金に替えるためなのに

もう 朝は遙か背後に去ってしまった

丸めた老婆の背に

日傘替わりの雨傘が白けた顔で揺れていた。

道いっばいに脹れあがる陽光の中に

身重の女が疲れた足を引きずって行く  
腹の子を葬るために

白い墓地を求めて来たのだ

生まれて半年にしかならない赤子が

ゴム製の乳首をくわえたまま

その背に首をのけぞらせて眠っていた。

夏が あらゆる湿気を奪い

地を睨めつけるその中を

路上の短い影は 鈍い足音を響かせて

方形の枠の外へ消えて行く……。

流れゆくものよ

流れゆくものよ。

水をたらふく吸いこんで

疲れきって流れゆくものよ。

おまえの眼は落日の光にめしい、

おまえの耳はうみねこの叫びに破れた。

今、夏の海に身を委ね、

塵芥の衣を着るおまえに

だれが石をなげようか？

おまえの上におおいかぶさっている現実が

あすの風に乗ってやってきて

この陸に息をひそめているわれらに

重い冷たい石を思いつきり

たたきつけるかもしれないのだから。

流れゆくものよ。

過去から未来へ 海底の土になりゆくものよ。

おまえの眼がどこかの貝の胸の中で

黒い真珠になるように。

おまえの耳が どこかの珊瑚の林の中で

血の色の木となるように。

流れゆくものよ……。

せっかく推薦していただいたのに、臆病な私は尻込みしてしまい、どこにも所属しようともしなかったの  
でした。

II 高等学校文化連盟文芸部会の創設に  
向けて

## 一 陽の当たる場所へ

— 高校生の発表の場を広げて —

昭和四十二年大学を卒業、二年間の講師生活を経て任用され、平成十六年三月に定年まで一年を残して退職するまで、県内各高校に勤務しました。

昭和五十三年、思いがけず『あきたの文芸』青少年の部、詩部門の選考を委嘱され、昭和五十七年まで五年間担当しました。昭和五十五年には、現在活躍している見上司さん(当時高校一年生)の詩が第一席でした。

昭和五十七年十月、突然、秋田県高等学校文化連盟設立に向けて、新聞部とともに文芸部も部会を組織するようにと命ぜられました。その春に顧問になったばかりでしたから断ろうと思ったのですが、「職務命令だから断れないよ」と言われてしまいました。やむを得ず、高文連設立のモットー「文化活動の底辺の拡大と活発化」をめざして組織化に取り組むことになりました。

そして、昭和五十八年五月二十六日、日本海中部沖地震のあの日、秋田北高四階の会議室で、六月一日の高文連設立大会に向けて最後の文芸部会設立準備委員

会を開いていました。大揺れに揺れたおかげでどうか、それまでなかなか決まらなかった案件のすべてが一気に決まり、文芸部会は無事にスタートしました。以来、小坂太郎さん、米屋猛さん、井上隆明さんら多くの先達に支えられ、現在も活動は続いております。

当時、文芸部に所属する高校生の発表の場は、秋田県高等学校文芸コンクールだけでした。現在は県コンクールを経て全国コンクールへの道も開けております。また、「北海道・東北地区文芸道場」「全国文芸道場」と交流の場も広がっております。

忘れられないのは、斎藤勇一さんが指導してくださっていた平成六年に、能代北高生・高橋紗和子さんが全国高校文芸コンクール詩部門で最優秀賞・文部大臣賞を受賞したことです。この受賞をきっかけに平成七年度には秋田県高等学校文化連盟賞が設けられました。秋田の高校生は詩部門だけでなく文芸部誌・短歌・俳句などさまざまなジャンルで大活躍でした。こうしてマイナーな文芸部の活動にも陽が当たるようになりました。

平成十五年文芸部会設立二十周年を迎え、記念誌を作成することになりました。卒業生が寄せてくれた文章から、文芸部会が部員みんなの「心の居場所」となっ

ていたことを知り、本当に嬉しく思いました。

### Ⅲ 秋田・花の詩祭

少し前に戻りますが、育児休暇中であつた昭和六十一〜六十二年頃、秋田に大人も高校生ともに発表できる、「花」をテーマにしたイベントができないものかと思はば考えていました。つれあいは、やりたければやってみたらと背中を押してくれました。

そこで、米屋猛さんに相談したところ賛成して下さつて、早速実行委員会を組織することになりました。実行委員長の小坂太郎さんをはじめ県内の詩人の方々が実行委員として名を連ねて下さいました。

私は角館で育ちましたので、第一回はぜひとも角館でと考えておりました。角館町や秋田県教育委員会、秋田県高等学校文化連盟の後援も得られ、昭和六十三年春、満開の桜のもと角館町樺細工伝承館で、詩人の吉原幸子さんをお迎えして開催することができました。

第二回は平成元年鈴木ユリイカさんをお迎えして、第三回は沖繩の詩人岸本マチ子さんをお迎えして、秋田市で開かれました。第二回・第三回は秋田市の助成金をいただいていたの開催でした。特に第三回では秋田市

立中通小学校合唱部の歌やピアノリストの泉さんの演奏もあり、とても雰囲気の良い「花の詩祭」となりました。平成三年の第四回は新川和江さんをお迎えして、久しぶりに角館で開くことができました。第五回は引き続き、角館で開くことになりましたが、「秋田・花の詩祭」としてではなく、「桜の詩の夕べ」となっておりました。記念講演の講師には「花まいらせず」の詩人高橋順子さんをお願いしました。

どうにかこうにか五回続けることはできましたが、事務局を担当してきた私の多忙を理由に区切りとすることにしました。ご理解とご支援をいただいた方々には大変申し訳のない結果になってしまいましたので、あめるときは区切りをつけざるを得ない状況でしたので、止めてしまったことには悔いはありません。

#### 《秋田・花の詩祭》の趣旨》

「みちのくの春は、金縷梅まんすいばいに始まり、辛夷、桜、梅、李と一斉に開く花々で埋まる。長かった冬、厚い雪雲の下で、来る日も来る日も黙々と生活してきた人々の瞳は、ようやく明るくひらけた空に向かってキラキラ輝く。

人々は長い間、『花』に『いのち』を振り返り、人の心との深い関わりを見てきた。『花』を愛する心は、

『いのち』をいとおしむ心に通じる。

『渇きの時代』と言われる現代にあつて折に触れ、花に寄せる思い、花に触発される思いを昇華させ、それぞれの年代のやわからかなみずみずしい感受性をもつて詩として表現したものを、ただひとりのものとせず、広く親しみ記録し、伝えるべく、花の詩祭を開催するものである。」

## IV 児童文学との出会い

### 一 児童文学のおもしろさ

平成十六年三月、定年より一年早く退職しました。平成十五年十一月に文芸部会の『創立二十周年記念誌』を作成し終えると、すっかり気が抜けてしまいました。そのままだったらと一年を過ごすことは生徒に申し訳ないという思いと、もうやるだけのことはやったから未練はないという気持ちでした。

平成十六年十二月に思いがけず、聖園学園短期大学から声がかかり、二年間の非常勤講師を経た後、専任として六年間「児童文学」や「文学」などを担当しました。

この仕事に就いてあらためて児童図書を読んでみると、幼い頃なぜ夢中で読んでいたのかがよく解りました。映画「借りぐらしのアリエッティ」の原作「小人の冒険シリーズ」や「ゲド戦記」、「守り人シリーズ」など、児童文学の世界の広さ、奥ゆきの深さに、どっぷり浸かって、もしかしたら学生たちよりも私の方が楽しんでいたのかもしれない。

その間に昔話の世界にも惹かれ、グリム童話の研究者である小澤俊夫先生の「東京・昔ばなし大学第四期」に三年間六回の講座に出席し「グリム童話の旅」にも参加しました。この旅が私に再び詩を書かせてくれました。現在、「秋田・昔ばなし大学」実行委員の一人として取り組んでいるところです。

### 二 絵本——こころの解放——

「児童文学」の授業の中で学生が最も喜ぶのは「絵本と絵本作家の研究」です。普段は何気なく絵本を選んで購入していますが、グループ活動でこの研究をやり、発表した後に実際に読み聞かせまでやると、学生の成長は傍目にもよくわかります。私が見つけられなかったことを学生たちは持ち前の鋭い感覚で見つけ出

します。自分たちで発見したことは何にも替えられないことですから、ずっと心に刻まれていることでしょうか。

絵本を読むうちに心はゆったりとその世界に遊びます。現実の中で辛く苦しいことがあってもその世界にいたときはそれらを忘れ、心を解き放つことができるのです。その代表的な絵本がモリス・センダックの『かいじゅうたちのいるところ』（一九七五年十二月第一刷）でしょう。子どもはいつも天使であるとは限りません。時にはこころの枠を外して遊び、暴れ回ることもあります。その後でやがて帰るべきところに戻ってきます。この「帰る所がある」ということが、子どもにとって一番の安心なのでしょう。いつもいい子でいなければならないとしたらそれは拷問に等しいのではないのでしょうか。

私が好きな絵本はいっぱいありますが、いつも読み聞かせるのは『ぐりとぐら』（中川李枝子・作、山脇百合子・絵 一九六七年一月第一刷）。これも学生たちが必ず挙げる一冊です。森の動物達と一緒に作りたてのかすてらを食べるぐりとぐらの兄弟野ねずみのお話子どもたちは大好きです。鼻をひくひくさせながら絵本の中のカステラを食べるしぐさをします。そ

れほど絵本の中に入り込んでいくということでしょうか。

絵本の世界は必ずしも美しく楽しいものだけではありません。おいしい果物の絵本の隣りに様々な動物達のうちをとりあげた絵本もあります。絵本作家の方々はいいかげんなごまかしはしません。実によく細かいところまでスケッチをして子どもたちに本当の世界を見せてくれます。

中学生くらいになると「一〇〇万回生きたねこ」（佐野洋子、一九七七年十月第一刷）を味わえるようです。これも学生たちの好きな一冊です。この絵本は「本当に生きる」ということはどういうことかを伝えてくれます。

## V 振り返れば

さまざまな出会いのなかでも新川和江先生、宗左近先生には温かく見守っていただいたと思っています。宮城県加美町のバツハホールでの「詩の噴火祭」では高橋順子さんと初めてお会いしました。

平成七年、詩誌「ARS」を退会（前衛詩に向かないからとの理由で辞めるようにと言われ）しました。

向かないながらも合わせようと苦しんだ日々。作品をまとめて詩集を出すことにしました。詩集『幸福な葉っぱ』に心惹かれていた私は、高橋順子さんの書肆といにお願ひすることにし、上京しました。持参した原稿を前にいろいろお話しするうちに、同じ昭和十九年生まれと知り、その夜、ふたりで牡蠣フライを肴にビールで乾杯したのでした。

その詩集について新川先生から丁寧なお手紙をいただきました。その中に「こんなに言葉を苛めてかわいそう」と書かれていました。(ああ、そうだった。何も義理に縛られて無理に書くことはなかったのだ)と来し方を振り返ってもどうしようもないことでした。以来、私は詩から遠ざかっておりました。

順子さんとはその後も手紙の遣り取りが続きました。たまたま舅・寺田光和が九十歳でも山に登ること、とくに秋田駒ヶ岳が好きで年に何回も登っていることなどを書いて送ったところ、一緒に登りたいとおっしゃって、実現したのは平成十四年夏のことでした。舅と車谷長吉さんの出会いの様子は私の詩「社会の窓」の通りです。

それからというもの、登山は私たちの毎夏の恒例行事となりました。翌年の早池峰山からはお二人の友

人、野家啓一さん(当時東北大学副学長・日本哲学学会会長)と盛岡市の詩人菊池唯子さんが加わり、その翌年の七時雨山も一緒にしました。下山した日の夕食時、「来年はどうする」となります。野家さんはワンダーフォーゲル部で経験豊富でしたし、舅も東北のあちこちの山に登っており、つれあいは山岳部顧問をしたこともあつてさまざまな情報に通じておりました。毎年五月になると予定の山の周辺を踏査して、宿や見学箇所を絞りこむのですが、この事前調査に出かけるのも大いに楽しみでした。

崩山・岩木山のときから車谷さんの大学の後輩で仙台市の詩人・俳人の水月りのさんが参加しました。この年から連句の座がはじまりました。捌くのはもちろん順子さんですが、車谷さんと順子さんは毎週月曜日の夜に「駄木句会」を続けておられるし、野家さんものさんも俳句を詠まれる。そんなこんなで「ああでもない、こうでもない」と、連句の約束事を教えてもらいながら歳時記をめくり、苦吟するのです。

その後、栗駒山(平成十八年)、森吉山(同十九年)、秋田駒ヶ岳(同二十年)、磐梯山(同二十一年)、八甲田山(同二十二年)と続きます。平成二十三年、この年三月十一日東日本大地震が発生し、岩手・宮城・福

島の沿岸部の被災は記憶に新しいところですが、野家さんご夫妻も被災され、避難所で過ごされたと聞きました。蔵王登山、野家夫人裕子さん初参加。みんなエメラルドグリーンのお釜に見とれることしばし。「来年は鞍掛山の頂上で、おじいちゃんの満百歳を祝って万歳三唱しよう」と鞍掛山（同二十四年）に決まりました。鞍掛山は頂上の手前が胸突き八丁、裕子さんがおじいちゃんの後ろに回ってベルトを掴んで引き上げ、の息を合わせてりのさんと私が前で引っ張り、を繰り返してようやく頂上到着。無事万歳三唱することができたのでした。

平成二十五年は男鹿半島。真山・本山・毛無山のお山かけをすることになりました。この年は車谷さん・順子さん・野家さんに私たち夫婦の五人。私たちは本山まで行って、そこから知り合いの安田さんが頼んでくれた方の車で真山神社の駐車場に戻って門前にまわり、三人の到着を待つことにしました。「今、五社堂に着きました。あと十五分くらいで下ります」と連絡があつてからなかなか姿が見えない。日が傾きかけた頃、順子さんと野家さんが車谷さんを両側から抱えるようにして石段を下りて来ました。途中で体調を崩してしまったようでした。後で、車谷さんが軽い脳梗塞

で少し前まで療養していたことを知りました。

平成二十六年は前年の反省を踏まえて、「登らずに歩く」ことにし、鳥海山の北麓をゆっくり歩くことにしました。裕子さんは不参加でしたが、いつものメンバーで湧水群・ぶなのあがりこ大王まで歩き回ってから、秋田市に戻ると、千秋公園のお堀は青空の下、満開の蓮の花が風に揺れていました。折角の機会なので、施設にいる舅に会ってもらいました。皆さんがそれぞれ声をかけてくださると、とても嬉しそうににこにこして、私に「あんたが連れてきてくれたのか」と言い、最後にひとりひとりと握手してお別れしました。

それより早い七月に、順子さんは詩集『海へ』を書肆山田から出版していました。出版直後にいただいて一読、二読。これまでに読んだ震災関連の多くの詩との違いを感じました。順子さんは千葉県飯岡の生まれで海を身近に親しんできました。東日本大震災の折、津波は彼女の生家をも襲ったのでした。それから三年あまり、心の奥深くの祈りを込めて綴られた詩に、私はただ素直に心を打たれておりました。その詩集がこの年の「歷程祭（未来を祭れ）」で第五十二回「藤村記念歷程賞」を受賞することに決まったと知って、早速、山仲間授賞式・祝賀会に出席することにしまし

た。当日は二次会にも参加して順子さんの朗読に新川さんが茶々を入れるたびに一同爆笑するという心温まる会の雰囲気存分に味わいました。翌日、りのさん・唯子さんと車谷さんも一緒にお昼を食べることを約束したのですが、ホテルのロビーで新藤涼子さん、牧田さん、若山さんと出会ったのもご縁、八人でお昼をいただいたのでした。

年が明けて平成二十七年、舅は三月二十五日に逝き、車谷さんはまるで後を追うように同年五月十七日に誤嚥で急逝されました。東北の山々にも登ったこの十年あまりの思い出は、忘れがたく心にたたまれてあります。

再び巡ってきた秋、今度は被災地福島県双葉郡川内村村民の皆さまが「藤村記念歴程賞」を受賞することになりました。贈賞理由は「草野心平が愛した川内村は被災地であるにもかかわらず、被害者意識だけでは復興は出来ないとし、3・11の年にも疎開地から帰り、心平が暮らした文庫の、天山祭を続け、そこから全国に、勇氣、元氣、希望などを発信させました。今ではソバガルデンと命名されたそばビール、漬物、いわなの燻製といろいろな物が新しく作られています。今年天山祭五十回記念の年でもあり、風評にも負け

ず詩を尊ぶ精神を中心に据えて生活している川内村は、私どもの胸を熱くさせました。」新藤さんからの「心平さんの朗読は本当にいいからぜひいらっしやい。」というお言葉に誘われるままに行くことにしました。

当日は、新しく「歴程」に加わった唯子さんも一緒に歴程祭に参加したのですが、順子さんの隣に座り、川内村の方々とお話しすることが出来ました。式の前から会場内に流れていた心平さんの自作詩朗読。温かい奥行きのある声、音楽を聴いているかのような自然なりズムがあつて、本当にいつまで聴いても飽きないなあと聴き入ってしまった。この朗読は天山文庫に行かないと聴けないそうで、まだ見ぬ天山文庫へと思いを馳せておりました。

順子さんのお宅に戻ってから詩集のことやら何やらとお話するうちに夜も更け、明朝の散歩を楽しみに休むことにしました。

翌朝、すがすがしい空気を吸いながら一時間ほど歩きました。以前、車谷さんも一緒に根津神社の池の鯉や亀に魅をあげたことや大名時計のあるお屋敷など思い出しながら。

詩集をまとめるにあたって私には迷いがありました。震災後出版された詩集の中には必ずと言っていいほ

ど震災関連の詩がありました。私自身いくつか書きましたが、いずれも作品としては弱く、被災された方々に対して恥ずかしいものだという自覚があったのです。順子さんと詩を読み返しながらやはり震災関連の詩は除こうと決めました。そして、私たちにとって最も懐かしい七時雨山から詩集名を『七時雨』とすることにしました。

平成八年の詩集『青の花』以来、長い間、詩を書かずに過ごしてきました。書くきっかけとなつたのは、平成二十年夏の「グリムの旅」でドイツのブーヘンバルト強制収容所跡地に訪れたことでした。書きたい、書いておかなければ、と思ったのでした。

さまざまな出会いや出来事を経て現在の「私」が在り、詩があります。これからも焦らず、書き続けて行くこうと思います。今頃になって、小学生の私に父が書いてくれた言葉―「倦まずたゆまず」の意味をようやく理解しかけています。

## 【後記】

詩集『七時雨』の打ち合わせをしているときにうかがった新川和江さんや高橋順子さんのことなど、興味深い内容だったので「通信」にお願ひした。一人だけ聞いたのでは、もったいないと思ったのである。

今後いろんな人に、詩人や詩壇のことなど、書いてほしいと思っている。

\*

秋田県多喜二祭実行委員会編集・発行の『小林多喜二 生地からの発信―秋田県多喜二祭の記録 第三集―』の製作を手伝った。第一集・第二集とも品切れで、この第三集も残部僅少とのこと。

《我が国の「閉塞状態」の典型となつた青年のワーキング・ブア、非正規雇用状態の激増と相まって「ちよつと待て、いま『蟹工船』の時代!」という鮮烈な呼びかけが「蟹工船ブーム」をひきおこし、数百万部の『蟹工船』読者を獲得し、さらには世界中で翻訳本が発行されるといふ激動の時期でもありました。》(工藤一紘氏「序」より)

二〇〇八年のブームは衝撃的で、吉本隆明氏に「『蟹工船』と新貧困社会」(『文藝春秋』二〇〇八年七月号)

# 『小林多喜二 生地からの発信』

秋田県多喜二祭の記録 第三集

## ●評論・エッセイ (1)

尾西康充／集団が生み出す暴力

倉田稔／小林多喜二卒業論文のミステリー

碓田のぼる／小林多喜二の短歌観と佐々木妙二

北条常久／「蟹工船」から「蒼氓」へ

長谷田直之／小林多喜二奪還事件とは何か

藤田廣登／秋田県小林多喜二展の過去・現在

北村隆志／最近の多喜二研究から備考三つ

島村輝／相次ぐ「蟹工船」の外国語翻訳出版

茶谷十六／二十年前に刊行されていたハングル版『蟹工船』

最上健造／石坂洋次郎は多喜二をどうみていたか

荻野富士夫／仮想・多喜二宛田口タキの返信

工藤一敏／ノーマ・フィールドさんと秋田、そしてタキさんのこと

## ●多喜二作品の考察

大田努／党生活者 尾西康充／不在地主

荻野富士夫／一九二八年三月十五日 宮本阿伎／工場細胞

佐々木孝一／「防雪林」の情景に寄せて

## ●小林多喜二と私、多喜二祭と私

小林多喜二と私……浜林正夫・本庄豊・高橋秀晴・東幹夫・

児玉金友・高坂裕子・伊藤芳昭・佐竹昱子・鈴木康吉・鈴木

貴裕・山田昇・高橋清人・横山孝子・大山兼司・宮腰孝悦

多喜二祭と私……富樫康雄・茶谷十六・齋藤重一・佐藤好徳・

松本礼二・佐々木孝一・佐藤三郎・大山兼司・中田博・松坂敏悦・鈴木甚郎・渡部雅子・和田康逸・

伊藤ヒサ子・嶋田宗雄・森下通也・小牧昌美・小牧薫・工藤初子・松島啓昇・木内和香・碓田のぼる

## ●評論・エッセイ (2) から

高橋秀晴／世界に繋がる研究テーマに ノーマ・フィールド／思想に血を通わせた

池田博徳／『時代を撃て・多喜二』に込めたもの 松澤信祐／なぜ今も読まれ続けるのか

神村和美／多喜二の戦いを支えたもの 嶋崎澄子／七沢温泉と多喜二

金泰京／小林多喜二文学の現存性 風間幸蔵／「多喜二祭の歴史」への感動と私の決意……

\*お申し込みは、工藤一敏 (090-7669-6387)、工藤有己 (090-6454-4768)

\*ファックス注文は、(tel・fax) 0 1 8-8 8 7-2 0 0 7

\*メール注文は、(E-mail) kazu-k-u@io.ocn.ne.jp

またはお近くの秋田県多喜二祭実行委員まで

好評発売中！  
限定 500 部



A5判並製本・カバー装  
280ページ  
頒布2500円  
送料300円

12

を書かせている。

ちなみに、youtubeでは、平成二十年度文化庁芸術祭テレビ門大賞受賞作品「ヒューマンドキュメンタリー いのちの記憶 小林多喜二・二十九年の人生」(HBC北海道放送制作)をみることができる。

また、多喜二が小樽の伯父の「小林三星堂」というパンとお菓子の店で働いたことは知られているが、この「小林三星堂」(現在、三星)がいまも苦小牧(本店)で繁昌していることをしった。「三星」のホームページには、「三星コラム」として、「小林多喜二 三星で過ごした五年間」(十回連載)が掲載されているし、「よいとまけ」というハスカップを使ったお菓子は、二十二回全国菓子博で「名誉総裁賞」を受賞している。(丁)